

# コンタクト・ゾーンの文化人類学へ

——『帝国のまなざし』を読む

田中雅一

## 1 コンタクト・ゾーンとはなにか？

コンタクト・ゾーンという概念が、今日使われるような形で取りあげられたのは、プラット (Mary Louise Pratt) 著『<sup>インペリアル・アイズ</sup>帝国のまなざし (*Imperial Eyes*)』[1992]においてであった。以下で詳述するように、本稿では彼女が想定しているコンタクト・ゾーンより広い意味で使用するを最初にことわっておきたい。すなわち、プラットは、ヨーロッパを中心とする植民地宗主国と非ヨーロッパ地域との「接触」を主たるコンタクト・ゾーンとして想定しているが、本稿では彼女の問題意識を継承しつつ、対象の拡大——たとえば性的身体——や<sup>エリア</sup>地域概念批判など、さらなる展開を目指す。

『帝国のまなざし』は序論と3部(9章)からなる。本書の主たる対象を18世紀半ば以後、ヨーロッパ人によって著される旅行記であると指摘している。われわれが本書から学ぶべき視点は大きく二つに分かれよう。ひとつは、彼女がコンタクト・ゾーンをどのような領域として見ているのか、という疑問に答えることである。それは現代の人文学ならびに社会科学にとっていかなる意義を持っているのか。もうひとつは、プラットによる旅行記の分析手法を批判的に取り組むことで、民族誌やルポルタージュを分析する手法を確立することである。それはまた、われわれ自身による民族誌記述になんらかの貢献をすることになる。

本稿では、第一の疑問点を中心に考察をすすめたい。プラットは序論でつぎのようにコンタクト・ゾーンの概念について定義している。

コンタクト・ゾーンという<sup>ソーシャル・スペース</sup>社会空間は、まったく異なる文化が出会い、衝突し、格闘する場所である。それは、植民地主義や奴隷制度など……しばしば支配と従属という極端な非対称的關係において生じる [Pratt 1992:4]。

コンタクト・ゾーンとは、植民地における邂逅の空間である。それは地理的にも歴史的にも分離していた人びとが接触し、継続的な関係を確立する空間である。それは通常、強要、根本的な不平等、そして手に負えない葛藤を巻きこんでいる [Ibid., p. 4]。

つまり、プラットにとってコンタクト・ゾーンとは「植民地支配の<sup>コロニアル・フロンティア</sup>辺境」を指す。しかし、彼女は、辺境が支配の側からの一方的な視点であるとして、コンタクトという、より相互交渉的な概念を採用したという。

「コンタクト・ゾーン」は、地理的かつ歴史的な分離によって以前は別れていたが、いまやその軌道が交差することになった主体の空間的かつ時間的な<sup>コプレゼンス</sup>共在を想起させる試みである。「コンタクト」という言葉を使うことで、植民地での出会いにおける相互作用、即興的な次元を際立たせたい。それは、伝播主義者の説明では簡単に無視され、また抑えられてきた征服と支配という次元である。「コンタクト」という視点は、いかにして主体が相互の関係において、かつ相互の関係によって構築されるのかということを強調する。それは、植民地支配者と被支配者、<sup>トラヴェラー</sup>旅行者とそれを受け入れる人びとの<sup>トラヴェリー</sup>関係を、分離やアパルトヘイトによってではなく、しばしば権力の根本的な非対称的な関係が存在するなかでの共在、相互作用、絡みあう理解や実践によって取り扱うつもりである [Ibid., p. 7]。

プラットにとって、相互交渉の世界こそがコンタクト・ゾーンを特徴づけているのであり、それを無視したり否定したりすることは非対称的な関係の遂行でしかない。

不均衡な力が働くコンタクト・ゾーンにおいては、ヨーロッパ人と現地人とが存在する、というだけではない。むしろ、どちらにも簡単に区分できない雑多な人びとが共存している。

さて、プラットの呈示するコンタクト・ゾーンは、彼女自身が認めているように、過去の植民地支配の分析に意味があるというのではない。植民地がこの世からなくなればコンタクト・ゾーンが消滅するというのではない。むしろ、その反対である。ポスト・コロニアルな状況で、またグローバリゼーションがかつてない勢いで進行していく状況で、コンタクト・ゾーンは、いまやいたるところに出現していると考えられるべきであろう。

さらに、プラット自身が繰り返しかえし述べているように、ヨーロッパの都市に住む知識人と対比されて、ヨーロッパ内の多くの民衆（百姓）たちが、やはり後進地帯に住む存在として位置づけられたのである。つまり、コンタクト・ゾーンは、ヨーロッパの内部にすでに生まれていたのである。

## 2 二つのコンタクト・ゾーン

それでは、人類学的知の創出起点のひとつであるフィールドとの関係でコンタクト・ゾーンとはどんな意義を持つのだろうか。ここでは、二つの視点を提案しておきたい。『帝国のまなざし』の対象は旅行家・冒険家とかれらが残した旅行記である。旅行家を人類学者に、旅行記を民族誌に言い換えれば、かれ・彼女の活動する場、すなわちフィールドがコンタクト・ゾーンだと言える。これは人類学者と他者との出会いの場であるという意味である。したがって、すべてのフィールドがコンタクト・ゾーンであり、それについての民

族誌は旅行記についてプラットがおこなったような批判的読解の対象となる。こういう意味でのコンタクト・ゾーンをコンタクト・ゾーン1とここでは記しておこう。伝統的に人類学者は、科学者としての旅行家と同じようにフィールドを相互作用的な力が働くコンタクト・ゾーンとみなすことを拒否してきたと言えよう。かれ・彼女は、自身を超越的な立場において他者の世界を自己完結的なものとして記述・分析しようとする<sup>1)</sup>。

フィールドを一部とする社会は、なによりも外界から孤立した、自給自足的な世界として描かれる。そこでは、キリスト教の影響や、ヨーロッパ人による経済的搾取や暴力的支配、ヨーロッパ産の物品の痕跡はきれいに払拭されている。痕跡があったとしても、それはこの社会の一部——周辺においてでしかない。人類学者は、フィールドの村人たちが最初に見た白人なのだ。

時間的には、ファビアンが指摘したように [Fabian 1983]、人類学の対象となる人びとは、同時代人でありながら、遠い過去に生きる存在として描かれ、人類学者たちが生きる時間から断絶されている。かれらの孤立や自律は、こうして構築されていく<sup>2)</sup>。

もうひとつの重要な視点は、こうした一般的な意味でのフィールド=コンタクト・ゾーン（すなわちコンタクト・ゾーン1）という考えではなく、ヨーロッパの影響を多大に受けたコンタクト・ゾーンについてである。人類学者は、純粋な異文化を探求してきた。意図的に、この第二の意味でのコンタクト・ゾーンを研究対象とすることを避けてきた。自己完結的な「伝統社会」こそが、人類学の対象であった。第二の意味でのコンタクト・ゾーン（以下ではコンタクト・ゾーン2）は、ヨーロッパ、すなわち近代に「汚染された」世界である。さらに、現代のグローバリゼーションの時代に特徴的なあたらしいコンタクト・ゾーンである。それは、雑多な文化実践が認められる異種混交的な場所であったり、反対に世界中どこにでもあるような非・場所 [Auge 1995, オジェ 2002] であったりする。

だが、実際のところはどうか。人類学者がフィールドに選んだ場所は多くの場合、すでにコンタクト・ゾーン2に位置する、と考えるべきなのではないだろうか。人類学者自身がファースト・コンタクトをとるような状況がかつてはあったかもしれない。しかし、多くの場合、それは現実にも、また理想的にもすでに接触がなされている。とすれば、コンタクト・ゾーン1とコンタクト・ゾーン2は限りなく重なることになる。しかし、人類学者たちは、どちらの意味においてもコンタクト・ゾーンの要素を排除する形で「伝統的社会」の再構成を試みてきた。

コンタクト・ゾーンに注目する意義は、こうした選択的な人類学者の営みが含む政治性を批判し、人類学そのものを再考する可能性がそこに含まれているからだと言ってよいだろう。現代の人類学者に問われているのは、フィールドが人類学者（自己）と他者とのコンタクト・ゾーン1であることを再認することである。それだけではない。どちらかというフィールドとしてふさわしくないと回避してきたコンタクト・ゾーン2をフィールドとして積極的に研究対象にすべきであり、またコンタクト・ゾーンに特徴的な要素を回避して描写されてきたフィールドをもう一度再考すべきなのだということである。そのとき、以下に示すワイルド・サイドや「スケイプ」という視点が重要な意義を持つことになるのである。

文化人類学者たちによる自覚的なコンタクト・ゾーンの研究史については別稿に譲りたいが、その端緒となったのはマックス・グラックマンの通称「<sup>ザ・ブリッジ</sup>橋」であろうか [Gluckman 1940]。かれの後継者が都市人類学の先駆とも言える炭鉱都市での調査を始めたのは当然なのかもしれない。<sup>3)</sup>以下では、個別の研究を取りあげるのではなく、人類学の歴史的展開において、コンタクト・ゾーンとしてのフィールドで出会う他者がどのように変化してきたかを概観したい。

### 3 文化人類学の視点から

わたしは、かつて人類学が対象にしてきた他者を、「<sup>プリミティヴ</sup>未開人」、<sup>ペザント</sup>農民、<sup>パヴァート</sup>性的異常者の3つに分けて説明したことがあった。以下、簡単に説明したい。

19世紀から20世紀にかけての西洋にとって他者とは未開とオリエントであった。オリエントは文明社会ではあるが、しかし、過去の文明である。そして、西洋のみが未来に開かれた文明であると考えられていた。東洋学は東洋を、人類学は未開を担当した。<sup>4)</sup>本格的なフィールドワークを主たる方法に据えた近代的な人類学は、まず太平洋などの島々の調査、アフリカ社会、そしてオーストラリアの先住民たちの調査をおこなった。

1950年代になると、今度は農民 (peasant) が対象として研究は確立されていく。<sup>5)</sup>これが第二の他者である。シカゴ大学のロバート・レッドフィールドなどが中心となったメキシコ研究が農民研究の先駆者として位置づけられている。かれの最初のモノグラフがでたのは1934年 [Redfield and Rajas 1934] のことである。その後、レッドフィールドの弟子たちによって中国、インド、日本などについての「文明」を対象とする文化人類学的研究が広がっていった。<sup>6)</sup>イギリスでは、マリノフスキーの弟子で太平洋の島ティコピアを調査したレイモンド・ファースが、マレー人漁民のモノグラフを1946年に刊行している [Firth 1946]。農民研究の対象は、文明、つまり文字のある世界ではあるが、都市ではなく田舎である。シャニン [Shanin 1971] が指摘しているように、農民社会とは部分社会 (part society) である。それは文明あるいは国家の一部であり、未開社会のような自足・自立した社会としてとらえることはできないという認識に依拠している。

1970年代になると都市人類学が確立するが、しかし、やはり都市においても、結局人類学はマイノリティを対象とすることになる。1950年代に始まるアフリカを中心とする都市研究は鉱山都市などにおける民族集団の関係や都市に移住してきた人びとと母村 (hometown) との関係などを主題に取りあげた。<sup>7)</sup>ここでは、わたしはパヴァートという言葉をあえて使いたい。それは簡単に言えば性的異常者、すなわち「変態」である。都市に住む少数民族 (エスニック・マイノリティ) に目を向けた人類学は、今日、その射程に同性愛を典型とする性的マイノリティをとらえつつある。これらの他者が、今までの人類学の変遷を端的に物語っている、とわたしは理解している。

それを簡単にまとめれば、地域的な周縁性、つまり未開人 (ヨーロッパ社会を中心とする世界の周辺) や農民 (都市を中心とする国家の周辺) から、性的異常者という、より不可視な周縁性へと移ってきたということである。第三の段階にジェンダーの文化人類学も

入る。なぜならジェンダー研究は女性の「発見」によって生まれたのであり、女性は男性との関係で周辺的存在だからである。地域や生業で他者とされる存在ではなく、よりアイデンティティに関わる、主観によって規定される他者が人類学の対象になってきた。事実最近では、同性愛、トランスジェンダーや摂食障害など、身近な他者、他者とも言えない他者へと関心が移ってきている。

人類学が対象とする他者の変化は、外的にはグローバリゼーションの過程、すなわちヨーロッパ社会が他者を見出し、あるいは内的な他者を見出し、かれらを植民地化し、改宗し、規格化していく、コンタクト・ゾーンの拡張の過程と表裏一体である。

プラットのコンタクト・ゾーンは都市を拠点とするヨーロッパ知識人による未開人（東洋を含む広い意味での非ヨーロッパ人）と農民（ヨーロッパ内の未開）とのコンタクトを、主として想定していると言えよう。問題は三番目の他者とのコンタクトである。

わたしは別のところで、性的異常者などの世界をワイルド・サイドと名付けた。

1972年に録音されたLPで歌手のルー・リードは「ワイルド・サイドを歩け」と歌っている。これはニューヨークに生きる女装男娼たちの世界を綴ったもので、女装して男性相手に商売をする男娼たちが描かれている。そして「彼女たち」に「裏街道（ワイルド・サイド）を歩きなよ」と語らせる。

裏街道、すなわちワイルド・サイドとは性的異常者たちが生きる裏の世界にはかならない。それは、かれら／彼女たちの世界であるが、閉鎖的な空間ではない。むしろ、コンタクト・ゾーンと呼ぶのがふさわしいだろう。

ワイルド・サイドでは、性風俗のルポルタージュや医学関係の報告書が旅行記に取って代わる。ここでもまた、われわれは「強要、根本的な不平等、そして手に負えない葛藤」に出会うことになるはずだ。

#### 4 異化・自己民族誌・トランスカルチュレーション

ところで先ほどのパヴァートという言葉についてだが、これは動詞として、「墮落させる」、「誤らせる」、「性的に倒錯させる」などの意味がある。つまり、「正常」を異常にするということである。名詞は、「墮落者」、「変態」、「性的倒錯者」という意味である。この点についてはすでに述べた。問題は、パヴァートの反対はなにか、ということだ。この動詞の反意語は、コンヴァートである。コンヴァートとは、もちろん広い意味で変化させていくという意味はあるが、周知のように、われわれが一番理解しやすいのは、人を転向させる、つまり改宗させるということである。文明対未開、あるいはヨーロッパ（キリスト教徒）対非ヨーロッパ（異教徒）という対立において認められるのは、コンヴァートの力である。つまりヨーロッパが非ヨーロッパ社会を広い意味で「改宗」していくという力である。それは隠喩的でもあるし、文字通りキリスト教に改宗しようという力や意志である。つまり、コンヴァートには、権力者が他者を変えさせる、同化させる、という意味が含まれている。それにたいし、パヴァートは、マイノリティの世界がわれわれを変える過程を意味し、そのような過程で働く異化の力を想定している。

他者からの働きかけについて、プラットは自己民族誌あるいは自己民族誌的表現という概念を提案している。それは、旅行記など広義の民族誌の対象となる人びと自身による自己表象の試みである。

これらの言葉でわたしは、植民地化された主体が宗主国の人びと自身の言葉に<sup>オトエスノグラフィ</sup>関与して自分たちを表象しようとする事例を指している。民族誌のテキストがヨーロッパ人がかれらの〔通常征服された〕他者を自分たちのために表象するのであるとすれば、自己民族誌のテキストはこれらの中心世界<sup>メトロポリタン</sup>の表象に反応し、またそれらとの対話によって他者たちが構築するものである。……自己民族誌は、自己表象についての「真真正な」あるいは土着の形態として通常考えられていないものである。むしろ、自己民族誌は征服者のイデオロムとの部分的な協力や流用を含む。……それらはしばしばバイリンガルで対話的である。典型的な自己民族誌はそれを受ける側についても均質ではない。それは一般に中心世界に位置する読者と語り手自身の集団に属する知識人の両方に向けられているからだ。そして当然その受け取り方はおおいに異なる。……自己民族誌的表現はコンタクト・ゾーンについてのひろく行きわたった現象で、その起点から見た帝国の征服と抵抗についての歴史を解きあかすのに重要になろうと信じている [Pratt 1992:7]。

ここでプラットは、コンタクト・ゾーンで生じる現象として、対抗的な表象に言及している。そこで、人びとは征服者（ヨーロッパ人）の言語や表現を使って、自らを表象しようとする。同じことは、表象だけでなく実践についても当てはまるであろう。たとえば、その例としてホミ・バーバによる模倣 [バーバ 2005] をあげることができよう。プラット自身は、コンタクト・ゾーンの主たる現象としてトランスカルチュレーションという概念を提案している。彼女によると、これは、従属的な立場にある非西欧人が、支配的な立場にある西欧人あるいは都市民によってかれらに伝えられるさまざまなものから新しいものを創出していく過程を意味する。ただし、それが本書で十分に議論されているとは言えない。

わたしは、自己表象し、模倣しあるいは抵抗する——トランスカルチュレイトする——他者を、「省察する他者」と名付けたい。コンタクト・ゾーンにおいて、他者はたんなる風景や生態系の一部でも、征服され搾取される犠牲者でもない。他者は、われわれを異化し、「省察的他者」として発見されなければならないのである。それは、あとで述べるように、他者の他者自身についての想像を想像すること、また他者のわれわれについての想像を想像することを強いる。

## 5 モダン・プリミティヴ

それだけではない。中心世界の連中が、植民地の慣習を否定・破壊するどころか「流用」あるいは模倣することさえ生じる。トランスカルチュレーションという概念そのもの

に、相互交渉的側面を認める必要がある。その典型がモダン・プリミティヴの実践である。

モダン・プリミティヴという言葉が注目を浴びたのは、1989年に公刊されたサンフランシスコを拠点とする雑誌 *Re/Search* の特集であった。特集名はそのものずばり『モダン・プリミティヴ』で、<sup>タトゥー</sup>刺青やピアッシングという言葉が並んでいる。扉にはこれから紹介するファキール・ムサファーが北米先住民のサン・ダンスに参加したときの写真が載っている。かれの胸はすどい金属の爪でえぐられ宙吊りになっている。腕には北米先住民を想起させる鳥の羽が飾られている。またペニスがかみもで強く縛られている。本書はムサファーを含む25名の人物から、さまざまな身体加工の体験を聞き出している。

ムサファーはインタビューに答えて「幼少の頃からよくトランス状態に入り、また肉体への強力な感覚に対する強い欲望があった」[ムサファー 1992: 184]と告白している。そして、6、7歳の時にカーニバルで刺青の男性に強く惹かれる。自分の体に文様を刻み、穴をあけたいという欲望におそわれる。こうしてかれの身体加工の遍歴が始まるのだが、かれが惹かれていたのは、『ナショナル・ジオグラフィック』が紹介する異文化の風習であった。ムサファーはモダン・プリミティヴという言葉で1967年に生みだした。これは「原初の衝動に応じて肉体に何か手を加える人」[ムサファー 1992: 192]を意味するという。かれが「カム・アウト」したのは1978年のことだ。ムサファーにとって、身体加工や異文化の暴力的な儀礼は、この原初の衝動を喚起し、その要求を満たすものなのである。ムサファーは、こうした儀礼が現代社会（合衆国）の閉塞状態、大衆の疎外を克服できると感じている。

モダン・プリミティヴの思想には、たしかに多くの問題が含まれている。たとえば、かれらは未開社会を理想化している、文化というものを固定的に考えている、などの批判がある[Eubanks 1996]。冒頭で指摘した二元論的他者像から一歩もでていないというのである。しかし、わたしたちが直面する「身体消失」という状況において、モダン・プリミティヴによる身体をめぐるさまざまな実践を無視するわけにはいかない[Pitts 1998]。また、身体を所有する対象とみなす、意識中心の思想を額面通り受け取るべきではなかろう。たとえばムサファーは自傷を伴うある儀礼についてつぎのように述べているが、そこには、意識に対する身体「反乱」が活写されている。

槍をかたかたいわせて震えさせながら動けば動くほど槍は皮膚に深く刺さり、長く続ければ続けるほど深く刺さるのです。……強烈なエクスタシー状態になり、私は何度か経験したことがあります、完全な意識の変容状態に至るのです [ムサファー 1992: 221]。

ムサファーの実践を、他者のさらなる搾取であると批判することはたやすいかもしれない。しかし、コンタクト・ゾーンに相互交渉的な動きを認めようとするなら、こうした実践もまた見逃すべきではないだろう。

モダン・プリミティヴは、初期の段階から、大っぴらではないにしてもつねにセクシュ

アリティとの関係が取りざたされてきた。ムサファーは自虐志向があるのだろうか。それによって性的快楽を得ているのだろうか、といった問いかけである。かれのインタビュー記事 [Bean 2001] が、SM を実践するハードゲイたちについての論集に収録されていることは、このあたりの事情を雄弁に語っている。ムサファーの身体加工は、パヴァートな(変態的)セクシュアリティの実践と密接に結びついているのだ。つまり、ここでわれわれは、植民地支配の辺境としての伝統的なコンタクト・ゾーンと、新しいコンタクト・ゾーンであるワイルド・サイドとの出会いに立ち会うことになる。コンタクト・ゾーンそのものが重層化しているのである。われわれは、ヨーロッパという中心世界とそれ以外の周辺世界という繰り返され語られてきた非対称の関係に加え、ヨーロッパのなかの周辺世界、すなわちワイルド・サイドが非ヨーロッパ世界とコンタクトするという状況に直面しているのである。

以上、文化人類学の他者概念の変貌を念頭において、プラットの提案したコンタクト・ゾーン概念を吟味してきた。われわれは、コロニアルならびにポスト・コロニアルな現象以外に、ワイルド・サイドという概念を加えることで、より現代的な人類学の可能性へと近づくことができるのである。

## 6 地域・風景からコンタクト・ゾーンへ

つぎに、ゾーンと同じ空間に関わる<sup>エリア</sup>地域についても述べておく必要がある。地域概念は、国家単位の歴史・文化研究を克服するために提案された。その背景には、国家単位での研究には、国家そのものの政治的な人為性を考慮するとつねに限界があること、国家単位の研究はしばしば、意図しないにせよナショナリスティックな言説に絡め取られる傾向があることなどにたいする反省がある。それでは国家に代わって提唱された地域とはいかなる単位なのか。

ひとつは生態系に基づく単位で、このような考え方はわが国では梅棹忠夫の『文明の生態史観』に始まるといってよかろう。生態系と密接に結びつく形でさまざまな文化単位としての地域が提唱されてきた。

現代では開発や環境保全の視点から、国境を越えて地域を理解することが必須となっている。生態系に基づく地域にしても開発単位としての地域にしても、それはいわば上からの鳥瞰的視点という点で共通している。

また、戦略的概念としての地域という概念も無視できない。たとえば東南アジアという概念は、1943年に日本の南進を迎え撃つためにコロンボに設置された司令部の名前に使用されたのが、その現代的な意味の起源である。サイードの『オリエンタリズム』での指摘を待つまでもなく、地域研究が植民地支配や国家利害と密接に結びついて発展してきたことは自明の事実である。地域研究が国家戦略の一部として推進されたのであるなら、地域概念もまた国家中心主義の帰結でしかない。

一国主義を越える、というスローガンにもかかわらず、地域はしばしば既存の国家の集積にすぎない。その結果、ヨーロッパ連合やアセアンといった、国家を単位とする政治的

な地域連合体と限りなく重なってしまうということもたしかである<sup>8)</sup>。

こうした鳥瞰的地域概念にたいして、松田素二は虫瞰的な視点から、民衆のネットワークに注目し、下からの地域主義を主張している〔松田 1993:23〕。松田はまず、先に指摘したようなヨーロッパの植民地支配やアメリカの世界戦略が地域概念を必要とし、それを生み出したということだけが問題ではない、「地域を地域としてまとめる〈眼差し〉自体がすでに権力的である」〔松田 1993:23〕と指摘する。そして、つぎのように自問する。「私たちはこの〈眼差し〉の前でなす術がないのだろうか。そんなことはない。地域研究が、この〈眼差し〉によって見つめられてきた側の人々と〈共にある〉ことができるならば、可能性は開けてくるに違いない。」そのために必要なのは、「地域研究の出発点は実際の人々の生活共同の現場にあるということであり、……〈眼差し〉によって切りとられた(外部から与えられた) 範囲を自らのものへと変換・創造していく〈地域〉の自己運動の論理に注目することである。」〔松田 1993:23〕と述べている。

ゾーンは、こうしたミクロな空間概念そのものを意味するのではない。しかし、「見つめられてきた側」の視点を無視すべきではない、という松田の主張は、プラットが繰り返して述べてきたことであり、ゾーン概念の基本的な理解と重なる。

ゾーンと地域との大きな違いは、後者の視点から見ると、コンタクト・ゾーンはつねに周辺に位置するということである。地域をどうとらえるかは別として、地域研究がなによりも地域を総合的な視点から、その特徴を明らかにすることを目的にしているということを思い出してほしい。地域とは歴史的、文化・社会的になんらかの特徴が明らかになる「実体」あるいは明らかになるはずの対象である。これにたいし、コンタクト・ゾーンとは、なによりも視点である。それは他者と出会う場であるが、場そのものの特徴が問われるというよりは、その出会いを理解するための枠組みとみなすべき概念であろう。地域という考え方は、結局、中心を増やしはするが、ヨーロッパの都市社会と同義の中心社会<sup>メトロポリタン</sup>を不十分に相対化しているだけで、根本的な批判とは言えない。コンタクト・ゾーンに注目することは、これまで当然とみなされてきた中心と周辺との関係を根源的に逆転させることである。

とはいえ、以下のような批判があるかもしれない。プラットの定義によれば、先に異なる文化が存在し、それが接触する領域がコンタクト・ゾーンであった。コンタクト・ゾーンを理解するには、接触する単位である文化の理解がなによりも必要であり、それは地域研究こそコンタクト・ゾーンの研究に先立つべきであることを意味していないだろうか、というものである。実際、ヨーロッパの知識人社会のあり方を知らなければ、コンタクト・ゾーンやそのエイジェントである旅行家を理解することは不可能であろう。その意味で『帝国のまなざし』は、すぐれたヨーロッパ思想史でもある。だが、本稿では、むしろこうした考えを前提としている点がプラットの限界であると考えたい。われわれは、フィールドそのものがコンタクト・ゾーンだということ、またコンタクト・ゾーンがあらゆる場所に認められると指摘してきた。他者の研究はすでにコンタクト・ゾーンの研究なのであり、その自覚が今求められているのである。コンタクト・ゾーンの研究は、特定の文化・地域の研究のあとになされるものではないのである。

『帝国のまなざし』は、地域論でもあると同時に<sup>ランドスケープ</sup>風景論でもある。プラットは、18世紀以後の旅行記における風景の記述を分析することで、著者と他者との関係（あるいはその不在）を論じている。この点については別稿で明らかにすることにして、重要なことは、彼女の分析対象となった他者は風景・土地（まさに地域研究が想定している「地域」と言ってもいいだろう）と密接に結びついていた。しかし、現代において「他者」はかならずしもその慣用的な意味での風景とともに現れるのではない。動植物と同じく、そこに溶けこんでいるのではない。現代社会におけるコンタクト・ゾーンを考えるうえで有効なのがアパデュライのスケイプ論 [アパデュライ 2004] である。

アパデュライは、現代社会を特徴づけるグローバル化をいかに理解するのか、その枠組みはなにか、という視点からスケイプという概念を提唱し、具体的に5つのスケイプを紹介している。それらは、エスノスケイプ [民族の地景]、メディアスケイプ [メディアの地景]、テクノスケイプ [技術の地景]、ファイナンススケイプ [資本の地景]、イデオスケイプ [観念の地景] の5つである。これらは、現代のグローバル化の過程においてあらたに生まれてきたスケイプ（景観）であるが、土地の連続性を前提とする地域概念と異なり、そのアンチ・テーゼであり、もっと流動的な要素の結びつきと、それによって生まれる世界を表そうとしているものである。アパデュライのスケイプ概念は、こうした土地との結びつきから解放されているところに独自性があると言える。それは、現代的な地域概念あるいはあらたなコンタクト・ゾーンとして考えるべきなのである。

以上、プラットの提案するコンタクト・ゾーン概念を地域やスケイプ論と比較・関連づけることで、コロニアル、ポスト・コロニアルな問題を超越して他者との邂逅する場として位置づけようと試みた。とくに、われわれにとって重要なのは、あらたなフィールドとしてのコンタクト・ゾーンであろう。

## 7 単所的から多所的民族誌へ

あらたなフィールドとしてのコンタクト・ゾーンの「発見」は、あらたなフィールドワークと民族誌の可能性を示唆する。

この点で興味深いのは、マーカスが提案した従来の<sup>ユニサイティッド・エスノグラフィ</sup>単所的民族誌から<sup>マルチサイティッド・エスノグラフィ</sup>多所的民族誌への転換である [Marcus 1995<sup>9)</sup>]。マーカスによると、多所的民族誌とは世界システムにおける、もしくは世界システムについての民族誌を意味する。マーカスにとってもっとも重要な問いかけは、現代、つまりトランスナショナリティとか、グローバリゼーションといった言葉で形容される状況で、人類学がどのような視点を展開すべきなのかということである。多所的民族誌が対象としているのは、地域とか共住に基づかない集団に関わる。文化、言語、領土・居住地といった要素がうまく対応しない状況におかれている人びと、脱領域化した人びとを対象として想定している民族誌である。そして、そこではローカリティではなくソーシャリティが重視される。それは、人やものの動きを前提とする民族誌であり、マーカス自身は、こうした人の流れやものの流れを追うことを目指している。それは、われわれの言うコンタクト・ゾーンを対象にするフィールドワークであり、

民族誌だと言っているだろう。

ただ、話はそれだけにとどまらない。マーカスは想像力<sup>イマジネーション</sup>を強調している。さまざまなサイトを構成する領域を結びつけるものが（具体的なネットワークだけでなく）想像力なのだ。そして、それにわれわれがいかに関われるのかという問いかけがなされている。マーカスによると、他者についての想像力自体がグローバリゼーションの現代において活性化されており、その活性化された想像力にむしろ注目すべきなのである。想像力とはブルジョワジーの余暇とか逃避ではなく社会的な行為なのだ、と。これについては、スケイプ概念を提唱したアパデュライもまた「想像力こそが、社会的実践を編成する領域」[アパデュライ 2004:66] という言い方をしている。われわれも、ひとつの場所から相手を見ているのではない。われわれもさまざまな場所に関わらざるを得ない。ここでわたしが注目したいのは、われわれは他者による他者（われわれ）についての想像力をも考慮すべきである、という視点である。つまり、すでに指摘したように、他者は省察的な他者と化し、もはや伝統的な他者像の型に嵌めておくわけにはいなくなったのだ。

## 8 おわりに

本稿は、文化人類学的視点からの『帝国のまなざし』読解の試みである。まず、コンタクト・ゾーンの定義を紹介し、フィールド概念や他者像の変遷と関連づけて、コンタクト・ゾーン概念を人類学的文脈に位置づけた。さらに、地域研究における地域概念やグローバリゼーションを前提とするスケイプ概念などを検討し、最後にコンタクト・ゾーンへのアプローチとして多所的民族誌の可能性について考察した。プラットが繰り返し強調していたのは、コンタクト・ゾーンにおける権力の非対称性と、そこにおける複数のエージェントたちの相互作用である。これとの関係で、本稿は、モダン・プリミティヴの事例を紹介した。

今回は、冒頭で指摘した二つめの疑問である、旅行記批判の具体的内容を吟味することで、人類学にとっての旅行記とも言える民族誌批判の可能性について考えてみたい。

### 注

- 1) フィールド（ワーク）論については多々あるが、ここでは田中 [2006] を参照。
- 2) 時間の問題は、民族誌的現在<sup>エスノグラフィック・プレゼンス</sup>という記述のスタイル、すなわちフィールドワークをおこなった当時のできごとを、執筆時のものとして書くということ、ならびにあたかも現在（フィールドワーク時と執筆時）においてもそうであるかのように、はるかかなたの過去にあったとされる制度や慣習が今なお存在するものとして、過去のあるべき社会の姿を現在に蘇らせようとする、この二つの役割を果たすスタイルと密接に関係する。とくに後者の問題については清水 [1999] を参照。
- 3) 詳しくは、田中 [2001] を参照。ここでわたしは、グラックマンとその弟子たちによるマンチェスター学派の活動を分析している。
- 4) さらに言えば、西欧は社会学（市民社会）、政治学（国家）、経済学（市場）、（西欧の）過去は歴史学が担当した [Wallerstein 1996]。
- 5) peasantには漁民も入るので、厳密には農民と訳すのは誤りだが、ここでは慣例に従う。第一次産業社会と訳すべきかもしれない。

- 6) ただし、レッドフィールドの調査は1926年に始まっているから、農村調査という視点は長期のフィールドワークを核とする近代的な文化人類学の確立とほぼ同じ頃に始まったと考えることも可能だ。1940年代から50年代における農村ならびに「文明研究」についての事情は、[Singer 1972] に詳しい。文明世界を対象にした一連の研究のうち、ここでは [Marriott 1955] をあげておく。*Journal of Peasant Studies* が公開されるのは1973年のことである。
- 7) たとえば、[Epstein 1953, 1992; Mitchell 1956] など、ローズ・リビングストン研究所を拠点とする研究をあげることができる。1960年代末から1970年代にかけて都市人類学というタイトルの論文集が相次いで刊行されている（たとえば、[Cohen 1974; Eddy 1968; Southall 1973] など）。また雑誌 *Urban Anthropology* が公開されたのは1972年である。
- 8) 本稿では詳述できなかったが立本の研究 [1996] は地域研究の集大成でありまた出発点であることをここで指摘しておきたい。
- 9) 多所的民族誌については、*Canberra Anthropology* 1999（現在は *The Asia Pacific Journal of Anthropology*）の最終号に特集が組まれている。その後の展開については Marcus [2002] 参照。

#### 参考文献

- Auge, Marc 1995 *Non-Places: Introduction to an Anthropology of Supermodernity* (Tr. by J. Howe). London: Verso Books.
- Bean, Joseph W. 2001 *Magical Masochist: A Conversation with Fakir Musafar*, In Mark Thompson (ed.), *Leather Folk: Radical Sex, People, Politics, and Practice*. Los Angeles: Alyson Books.
- Cohen, Abner (ed.) 1974 *Urban Ethnicity*. London: Tavistock Publications.
- Eddy, Elizabeth M. (ed.) 1968 *Urban Anthropology: Research Perspective and Strategies*. Athens: University of Georgia Press.
- Eubanks, Virginia 1996 *Zones of Dither: Writing the Postmodern Body*, *Body and Society* 2(3):73-88.
- Epstein, Arnold L. 1953 *The Administration of Justice and the Urban African: A Study of Urban Native Courts in Northern Rhodesia*. London: H. M. S. O.
- 1992 *Scenes from African Urban Life: Collected Copperbelt Papers*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fabian, Johannes 1983 *Time and the Other: How Anthropology Makes its Object*. New York: Columbia University Press.
- Firth, Raymond 1946 *Malay Fishermen: Their Peasant Economy*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Gluckman, Max 1940 *Analysis of a Social Situation in Modern Zululand*, *Bantu Studies* 16:1-30, 147-174.
- Marcus, George 1995 *Ethnography in / of the World System: The Emergence of Multi-Sited Ethnography*, *Annual Review of Anthropology* 24:95-117.
- 1998 *Ethnography through Thick and Thin*. Princeton: Princeton University Press.
- 1999 *What is at Stake—and is not—in the idea and Practice of Multi-Sited Ethnography*, *Canberra Anthropology* 22(2):6-14.
- 2002 *Beyond Malinowski and after Writing Culture*, *The Australian Journal of Anthropology* 13(2):191-199.
- Marriott, McKim (ed.) 1955 *Village India: Studies in the Little Community*. Chicago: University of Chicago Press.
- Mitchell, J. Clyde 1956 *The Kalela Dance: Aspects of Social Relationships among the Urban Africans in Northern Rhodesia*. Manchester: Manchester University Press.
- Pitts, Victoria L. 1998 *Reclaiming the Female Body: Embodied Identity Work, Resistance and*

- the Grotesque, *Body and Society* 4(3):67-84.
- Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writings and Transculturation*. London: Routledge.
- Redfield, Robert and Alfonso Villa Rojas 1934 *Chan Kom: A Maya Village* (Carnegie Institution of Washington Publication; no. 448). Washington: Carnegie Institution of Washington.
- 1941 *The Folk Culture of the Yucatan*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Shanin, Teodor (ed.) 1971 *Peasants and Peasant Societies: Selected Readings*. Penguin.
- Singer, Milton 1972 *When a Great Tradition Modernizes: An Anthropological Approach to Indian Civilization*. Pall Mall Press.
- Southall, Aidan (ed.) 1973 *Urban Anthropology: Cross-cultural Studies of Urbanization*. London: Oxford University Press.
- Wallerstein, I. 1996 Open the Social Science, *Items* 50(1):1-7.
- アバデュライ, アルジュン 2004 (1996) 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』(門田健一訳) 平凡社。
- 梅棹忠夫 1974 (1967) 『文明の生態史観』中公文庫。
- オジェ, マルク 2002 『同時代世界の人類学』藤原書店。
- 清水昭俊 1999 「忘却のかなたのマリノフスキー——1930年代における文化接触研究」『国立民族学博物館研究報告』23巻3号, 543-634。
- 立本成文 1996 『地域研究の問題と方法』京都大学学術出版会。
- 田中雅一 2001 「英国における実用人類学の系譜」『人文学報』84。
- 2006 「序章 ミクロ人類学の課題」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』世界思想社。
- バーバ, ホミ 2005 『文化の場所——ポストコロニアリズムの位相』(本橋哲也, 外岡尚美他訳) 法政大学出版局。
- 松田素二 1993 「地域形成のダイナミズム——アフリカの経験から」『総合的地域研究』2:21-23。
- ムサファー, ファキール 1992 (1989) 「モダン・プリミティヴズ」(聞き手V・ヴェイル&アンドレア・ジュノ, 森本正史・山形浩生共訳)『夜想 特集ディシプリン』29:183-223。